

# 平成27年度 沖縄離島体験交流促進事業

沖縄県旅行・観光事業協同組合 株式会社カルティベート 共同企業体

## 背景・現状

- 沖縄21世紀ビジョンにおいて、離島地域の住民負担を『沖縄の心である「ユイマール精神」に基づき、県民全体で支え合う新たな仕組みを構築していく。』と謳っているが、現状として、沖縄本島地域の住民の離島地域への関心は低い状況にある。
- これまで県においては、離島地域における体験プログラムの作成や、体験・滞在施設の整備等を支援してきたが、今後はこれらの資源や民泊の取組等を有効に活用し、離島地域の活性化を図る必要がある。

## 今年度の課題

- 近年、子ども達のアレルギーが増加・深刻化傾向にあり、また、体験活動の機会が少なくなっていることによる「生きる力の低下」が問題になっている。
- 6年目を迎えた本事業では、それらを踏まえて安全管理・危機管理体制を整え、子ども達の健全育成を目指す。
- 今年度は、安全管理についての共通マニュアルをつくり、受入に関わる関係者全員が「命を預かる」という意識を高める。また、簡易宿所営業許可の取得のサポートや法規に準じた危機管理体制の構築を行う。

## 事業概要

将来を担う児童生徒が、離島の重要性、特殊性及び魅力に対する認識を深めるとともに、沖縄本島と離島との交流促進により、離島地域の活性化を図ることを目的として、沖縄本島の児童生徒を離島に派遣し、地域の人々や地元小学生との交流のもと、体験学習や民泊等を実施する。

## 期待される効果

- ①離島地域の文化、環境及び産業を活かした新たな体験学習の場の構築
- ②児童生徒において離島の重要性、特殊性及び魅力への理解が深まる
- ③児童生徒の豊かな人間性や社会性の形成
- ④本島と離島との交流促進
- ⑤離島観光の振興

## 内容

- 1)参加学校  
沖縄本島内の47小学校の児童  
(111クラス、3,491人)
- 2)派遣先離島市町村  
伊是名村、伊平屋村、伊江村、渡嘉敷村、座間味村、渡名喜村、粟国村、久米島町、宮古島市、多良間村、竹富町、南大東村、石垣市、与那国町、北大東村、本部町、うるま市  
(17市町村・19離島)
- 3)期間  
平成27年6月～7月  
及び9～12月
- 4)費用負担  
本事業にかかる費用は、旅行保険と昼食代以外は沖縄県の負担

# 事業スキーム

沖縄県  
企画部 地域・離島課

沖縄県旅行・観光事業協同組合、株式会社カルティベート共同企業体  
業務統括: 開(比嘉)梨香  
事務局長: 諸見里一壽

ロジスティック  
沖縄県旅行・観光事業協同組合

- ・日程調整(荒天時対策含む)
- ・旅行手配
- ・派遣学校との調整
- ・参加者情報の集約・書類作成
- ・保護者説明会の実施
- ・実施当日の添乗

国際旅行社

エア沖縄

沖縄ツアー

地域・学習サポート  
株式会社カルティベート

- ・プログラムの新規作成・質の向上
- ・コーディネーター・ガイドの育成
- ・民泊受入態勢の強化
- ・危機管理体制の構築
- ・オリエンテーションの実施
- ・交流会企画・運営の支援

アーストリップ

がじゅまる  
自然学校

SevenSeas  
宮古島

県内各離島、本島内小学校

## 本事業にファシリテーターがいる意義とは・・・？

### ①子ども達への効果

- ・学校側が目指す学びに沿った、ストーリー化された体験型プログラムデザインができる。
- ・体験プログラムに、より学びや気づきを促進する仕組みを取り入れることができる。
- ・これまでの蓄積から、派遣学校側へのアドバイザー的役割を担うことができる。

### ②受入れ離島への効果

- ・携わる人々(受入れ離島、派遣学校側等)の視点をつなぎ調整することで、双方にとってよりよい場をつくり出す。
- ・より深い学びや気づきを促進する体験プログラム開発などにアドバイザーとして携わることができる。
- ・派遣する子どもだけでなく、受入れ地域の子どもの学習効果にも目を配ることができる。

## ～毎年、受入れ離島側と取り組む5つのチャレンジ～

毎年、受入れ離島の方々と一緒に、様々なチャレンジをしている本事業。毎年、必ず取り組んでいることをご紹介します！



受入れ離島での打ち合わせ



プログラム作り作戦会議



派遣学校側での保護者説明会



児童向けオリエンテーション

### チャレンジ1. 受入れ体制の強化

派遣児童を安心安全に受入れる体制を強化するため、各島の緊急連絡体制図を見直し、再構築します。

今年度は安全対策・危機管理体制強化を図るため、「沖縄県体験の風をおこそう運動連絡協議会」と連携し、全離島で共通するマニュアル作成を地域の方々と協働して作成します。

### チャレンジ2. 新しい体験プログラム作り

地域の方々と一緒に、派遣児童の地域の特殊性や魅力に対する理解を深められるような、地域の特色を存分に活かした新しいプログラム作りに取り組みます。

H26年度の伊良部島では地元の漁師さん達と連携し、新しい体験プログラムとして「アギヤー漁体験」が作られ、この体験を通して派遣児童は島の自然や伝統的な漁業について学びました。

### チャレンジ3. 既存の体験プログラムの質向上

すでに既存のプログラムが多くある受入れ離島では、地域の方々と継続的に既存のプログラムの見直しを行うことを通して、質の向上に取り組みます。

H26年度の久米島では、5回の実施を最大限に活用し、日中のホームビジットから始め、夕飯を一緒にとる、風呂に入るなど段階的に取り組みを増やしたり、派遣学校からの要望などのフィードバックを通して、継続的にホームビジットプログラムの質の向上に取り組みました。

### チャレンジ4. コーディネーターやガイドの発掘・養成

地域のコーディネーターやガイドの方々のスキルアップや、新しいプログラム実施者の発掘・養成に取り組み、より多くの島の方々が関わることで、地域観光や地域振興の活性化に繋げる取り組みをサポートします。

今年度は、島のコーディネーター(希望者3名程度)を対象に他離島での実施を通じた現場研修を行うと共に、島側ファシリテーターの方々の交流を通じた離島間のネットワークの構築にも寄与します。

### チャレンジ5. 受入れ離島側の児童の学び促進

全ての受入れ離島で、本島の児童と離島の児童が互いに刺激を受けあうような交流を行います。

島によって、児童交流の内容はさまざま。何度も話し合いを重ね、より互いの児童の学びを促進するような交流を企画しています。

本事業を通して、離島の児童が本島に進学する際の友人づくりの練習や自信につながる経験ができるよう、積極的に取り組んで参ります。

## ～H26年度 島側の声～

本事業に参加した島側コーディネーターや島側行政担当者の声の一部を紹介致します。



島のおばあ達との交流会(渡名喜島)

●4回目の受け入れからは民泊を開始した。念願の民泊をスタートさせたことで島側のモチベーションが上がり、児童が泣きながら受入民家に感謝の手紙を読んだり、実施後にも民家に連絡をしている様子を見て、本事業が児童の心の豊かさに繋がると感じた。(伊平屋島)

●本事業を通じて旅館業法の許可を取得する方が増えた。(伊平屋島)

●通常少ない本島からの小学生を受け入れる事で島内の多方面に刺激になりこれからの渡嘉敷島を考える機会になっている。(渡嘉敷島)



民家さんと凧作り(宮古島・城辺地区)

●久米島は、今年度から民泊事業をスタートするにあたって、ホームビジット等の体験プログラムを実施することができ、良い練習の機会となりました。また、来島した小学生より空港売店の接客についてのご意見を頂けたことで、改善に努めるきっかけとなりました。(久米島)

●沖縄本島の子供たちと離島の子供たちが交流することによりお互い異なる文化を共有できたことが、とても良かった。特に離島の子供たちは少人数制なので、大人数の小学生との触れ合いは刺激になったと思う。(宮古島市)



狩俣小学校での交流会(宮古島・狩俣地区)

●受け入れ先地域の島の子どもたちは、小規模校の子供たちが多いので、派遣校の子供たちとの交流することにより、良い刺激になっている。また、農家等の方たちにも子供たちを受け入れることにより、はりあいができ、活力になっていると思われる。(宮古島市)

●新規の体験プログラムを島内の関係者と一緒に作り、来島する子どもたちに試してもらうことができる貴重な機会となっています。今年度は4年目でしたが、これまでに実施したプログラムのバージョンアップにも取り組むことができました。(池間島)

●地域の活性化に繋がる事が良いですね。地域の子ども達との交流で、自分達の地域の良さを学ぶ事が素晴らしいですね。(伊良部島・佐良浜地区)



民家さんとお別れ(伊平屋島)

●受け入れの回数を重ねるたびに体験内容の改善が出来たり、島でできる体験の新発見に繋げることが出来た。(伊良部島・伊良部地区)

●1,体験交流促進事業を通して地域の農漁業者、観光事業者の連携ができた。2,民宿の活用。3,各自での体験プログラム創出への意欲が見えてきた。(石垣島・川平地区)

## ～H26年度 参加者の声～

H26年度は、51校の児童生徒(117クラス)3,504名が16市町村に派遣されました。

H26年度に本事業を経験した本島児童、そして先生方の声を集めてみました。



稲刈り体験(伊平屋島)



豆腐作り体験(宮古島・西原地区)



機織り体験(久米島)



テープカットでお別れ(伊平屋島)

### 参加した本島児童・生徒の声

- 伊平屋島で不便だなと思ったことは、進学とケガの時です。でもよかったのは、優しい人が多いことです。理由は、私たちのために体験を準備してくれたり、民泊と観光までしてくれたからです。それだけじゃないくらいいっぱいしてくれました。また、みんなで伊平屋島に行きたいと思います。
- 座間味島の人たちは、みんな心があたたかくて、とてもやさしかったです。うみがめレクチャーや、ビーチシュノーケリング、ビーチコーミング、ビーチクリーンをして、よごすのも人、きれいにするのも人なんだと分かりました。
- 本物の魚を自分たちで釣って、自分の手ではじめて触ることができて、とてもたのしかったです。釣った魚を漁師さんが目の前でさばいてそのさばいた魚を食べてみるとスーパーで売っている魚と全然歯ごたえが違っていた。とてもたのしかったです。
- 農家さんが苗を植える時に、苗をひもではなくスキの葉で結んでいるという事に気がついた。「葉っぱだったら捨てても肥料になるから、地球にも優しいでしょ」と教えてくれた。私達は今買わないでもいいのを買っていると思う。私達が楽になると地球がその犠牲となり悪くなっている。

### 参加した本島先生方の声

- 本事業に参加させていただいたおかげで子どもたちがとても変わりました。丁寧に字で手紙をかいいたり、どうやったら相手に自分の感謝の気持ちが伝わるかなど真剣に物事に取り組むことが出来ました。そして改めて自分たちの地域のことも考えるようになり、この事業で体験したことをスタートにいろいろなことがプラスになり、今後の子どもたちの人生にすばらしい影響をあたえるものだと感じました。
- 民泊や農業、漁業体験という児童にとって貴重な体験ができたことは、5年児童にとって、とても大きな財産になりました。自分達の生活と違う体験をすることで改めて自分の生活を振り返り、感謝することができると思います。
- 離島体験で人とのコミュニケーションの苦手な子供達が、大好きな自然体験を通し、色々な方々とかかわる楽しさやコミュニケーションの大事さを感じる事ができたと思います。
- 小学5年生で、集団での離島体験はずっと思い出に残る体験になると思います。すぐには身につかなくとも、あの時のあの体験が、どこかで必ず将来の自分につながるものがあると思います。

## ～H25年度 参加者の声～

H25年度は、44校の児童生徒(102クラス)3,078名が16市町村に派遣されました。

H25年度に本事業を経験した本島児童、そして先生方の声を集めてみました。

### 参加した本島児童・生徒の声



黒糖作り体験(久米島)



サバニ体験(伊江島)



ドロまみれで綱引き(渡嘉敷島)



宿で三線のレッスン(石垣島)

- この3日間で思ったことは、この島の人のようなコミュニケーション能力を身につけたいということです。本島とはちがった離島の重要さがあり、将来、離島に関する仕事につきたいと思います。最後にこの研修に協力してくれた人々に感謝しています。
- この研修で、僕は物事の見方が変わりました。色々ありますが、一番は親の存在です。僕はあまり意識していませんでしたが島のお父さん、お母さんに話を聞いて、見方が変わりました。親にお礼を言いたいです。この研修に来て、良かったです。
- ウォークラリーをしていくうちに自分から積極的に島の人に話しかけていて、チームのみんなと協力してやっていました。このことで積極的に話すということを学びました。この離島体験で積極的に人に話して人のやさしさを学びました。
- 島は人口が少なく不便な島かと思っていましたが、違いました。人口は少ないけどみんなが助け合っているということがわかりました。島は本島と違ってコンビニも一つしかないし、ゲームセンターも無くてつまらないかと思っていましたが、自然に正面から向き合える素敵な場所だなと思いました。

### 参加した本島先生方の声

- 子供達は大変充実した3日間を過ごすことができましたと思います。最終日の離村式では大多数の子供達が民家さんとの別れを悲しんで泣いており船からカラーテープを投げ船が出港した後も子供達と民家さんがテープでつながっていたことに感動しました。最後まで温かく良くしてくださって、子供達はとても幸せそうでした。帰りのバスにおいても子供達は夏休みに民家さんに絶対に会いに行く！と何度も言っており島の魅力を感じる事ができたと思います。
- 島の皆さんが温かく迎えて下さり、本当に感謝します。3つの体験の中では、特にホームビジットが印象に残ったようです。島の方との交流が、子ども達の島のイメージをアップさせたようです。芋を植えた子が「冬にいもを掘りに行く」と約束したそうです。また島に足を運ぶ機会が得られたのは、良かったと思います。たくさんの方に助けられ、支えられた体験であり、子ども達と同様、感謝の気持ちでいっぱいです。関係者の皆様、本当にありがとうございました。海岸のゴミ拾いをした子ども達、ドライブで海を見た子ども達が、漂着ゴミや赤土について興味を示しています。環境について、どうしたらいいか、話し合っていこうと思っています。
- 子供達は「もっといたかった」「離島の小学校に行きたい」など島の良さを十分かったと思います。中には「民家さんにわがままを言って後悔している」という子もいました。親元を離れ民家さんと共に過ごした日々が子供達を成長させてくれました。教室では学べないことをたくさん学んだと思います。本当にありがとうございました。



東風平小  
143人

## 民泊、島の魅力堪能

# 伊是名で農漁業体験

【伊是名】八重瀬町立東風平小学校5年生143人が、沖縄離島体験交流促進事業の一環として7、8の両日、伊是名島で体験学習を行った。5、6人のグループに分かれ島内32世帯に民泊した。初日は、各家庭の家業体験。2日目は農協・漁協青年部の指導の下、農業や漁業体験を行った。農業体験では、カボチャの種まきの仕方を教えてもらい、丁寧に種をまいた。各家庭から、農業の仕事に就いた理由や、仕事のやりがいなどを聞いた。農業に誇りを持ち、ワタ漁を体験する東風平小学校の児童たち。8日、伊是名島

自然と共生しながら、作物を育てている農家に触発され、興味を持った児童もいた。

ワタ漁体験では、参加者全員で網を持ち、網に魚を追い込んだ。たくさん魚が網にかかったことを確認すると、大きな歓声が上がった。

引率した5年主任の照屋オリエ教諭は「どの体験も初めてで印象深いが、最も子どもたちの気持ちを引き付けたのは伊是名島の豊かな自然と、おいしい食事を用意して下さった民泊の方々の温かさだったと思う。台風襲来のため2泊3日の予定が1日短くなってしまうが、伊是名島の魅力を十分に味わうことができた。島の方々やスタッフの皆さんに感謝したい」と話した。

(東江京子通信員)

# 上本部小28人 離島体験

## 渡名喜村の児童らと交流

【渡名喜】 沖縄離島体験交流促進事業の一環として、本部町立上本部小学校5年1組と具志順子校長、教員の28人が9月24日から26日にかけて、渡名喜村を訪れた。



レクリエーションで交流を深める上本部小学校児童と渡名喜小学校の児童ら＝9月25日、渡名喜村立渡名喜小学校体育館

離村前の上本部小学校児童ら＝9月26日、渡名喜村フェリーターミナル



上本部小の児童は、1日目に社協を訪問し、お年寄りとの交流。島の様子や生活などを聞いたりするなど楽しく触れ合った。また、特産品加工センターでニンジンゼリー作りを体験した。  
2日目は、村内遺跡ウォークラリーや展望台散策を楽しんだ後、渡名喜小学校を訪れた。ドッジボールやレクリエーションなどを通して交流を深

めた。最終日には、渡名喜村の伝統「朝起き会」に参加し、村内清掃なども体験した。  
上本部小の小濱優希さんは「渡名喜小学校の友達と交流して、楽しい思い出ができた。大人になつたら、また島を訪れたい」と話した。  
渡名喜小4年の又吉真音さんは「たっくさんの友達と一緒にドッジボールができたことがとてもうれしかった」と話した。  
(笹原ナナ通信員)



# 交流事業で相互利益

## 小中学生 離島体験 島活性化効果も

沖縄本島の小・中学生を

県内離島に派遣する沖縄離島体験交流促進事業の事業評価会議がこのほど、那覇市の県南部合同庁舎であった。子どもたちを引率する教員や活性化を模索する島民、関わったガイドや旅行代理店など、それぞれの立場で感じたことなどを報告し合い、事業の意義を確か

めた。

事業は本年度で5年目。島の民家・民宿に泊まり、自然や文化、農漁業を体験し、島民や島内児童らと交流する。派遣学校数は2010年度に3校だったのが51校に増加、派遣児童数も163人から3500人余に拡大している。

評価会議で、子どもへの事業効果として引率教員は「本島に帰ってきてても島とのつながりを意識して、親を誘って再度島を訪れる子どもも出ている」と報告した。「離島のひととの触れ合いで、礼儀や人間関係の築き方が磨かれた」の声も上がった。

島の活性化について島側

参加者は「島の知名度が上がって、島民の生きがいにもつながる。島に直接、金も落ちる仕組みができてきている」などと成果を語った。事業を通して、初めて

島の農協や漁協と連携することができたとの報告もあった。

事業を企画したカルティベイトの開梨香社長は「学校と地域が一緒になり同じ

狙いを持って取り組める可能性が高まった。島内の皆さんも旅行会社も旅行者もウィンウィン(相互利益)の関係になれる」と事業の成果を説明した。